

塩の研究』一九八四）。古代の吉備は鉄と塩の生産で権力を伸張したのである。

第三節 北部九州の古墳時代

一 前方後円墳の出現

石塚山古墳 我が国で初めて前方後円墳が造られてからそれほと**赤塚古墳** どの時を経ずに、およそ三世紀の後半に現在の荊

田町役場の南の海岸部に大規模な人工物が造られた（図2—104）。ほぼ全体を径数十メートルの石で覆った姿はまさに石の山であった。

この石塚山古墳は日本列島で最初に造られた前方後円墳の一群に属し、全長一一〇メートル、後円部直径約六〇メートル、前方部長五〇メートルの規模をもつとされるが、墳丘確認の発掘調査が部分的にしかなされておらず、前方部前面に墓地が造営されている関係もあって正確な規模は確認されていない。古く江戸時代（一七九六年）に石室が開けられ、その際に銅鏡一四（一説に一一・一二）枚、素環頭太刀や銅鏃などが出土したと伝えられるが、現在では銅鏡七枚、鉄製素環頭太刀片・銅鏃一点などが近くの宇原神社に所蔵されて重要文化財に指定されている。

その後、昭和六十二年（一九八八）以降に数次にわたる発掘調査がなされ、その全体は未発表だが主体部の調査内容が公表

されている。それによれば、竪穴式石室は長さ一六メートル、幅一一メートルの巨大な墓壙（石室を埋めた穴）に納められていた。石室は大破していて、その痕跡から内法で幅一・四メートルと推測されたが、長さなどは不明のままである。江戸時代の記録では長さ三間（約五・四メートル）、床面の幅三尺（約〇・九メートル）、上端の幅二尺（約〇・六メートル）、深さ三尺余りと記録されていて参考になる。

この石室には通常と異なる特徴がある。一般の竪穴式石室では遺骸を納めた木棺を囲む部分だけが石材の木口面を揃えて空間を形成し、その外側は乱雑に石を投げ込んだような状態である（図2—77参照）のだが、ここでは墓壙壁に沿った、本来ならば全く見えないはずの部分で石室壁面と同様に面を揃えたように工作しているのである。その理由はまだわからない。町教委による調査では新たに舶載鏡（細線式獸帯鏡）片、琥珀製勾玉、碧玉製管玉、小札革綴冑、鉄鏃、太刀、鉄斧、鉈、蛸壺を含む土器片などが出土した（荊田町教委「石塚山古墳発掘調査概報」『荊田町文化財調査報告書』第九集、一九八八など）。

石塚山古墳と同じところに造られた古墳に宇佐市赤塚古墳がある。駅館川右岸の段丘上に位置し、全長六〇メートル弱の前方後円墳で周濠を伴う（図2—108）。これも古く大正十年（一九二二）に発掘されたために細部は不明であるが、大型の箱式石棺から舶載鏡五枚（盤龍鏡一枚、三角縁神獸鏡四枚）や玉類・鉄製品などが出土した。主体部こそ地域色ある石棺を使用するが、出土品

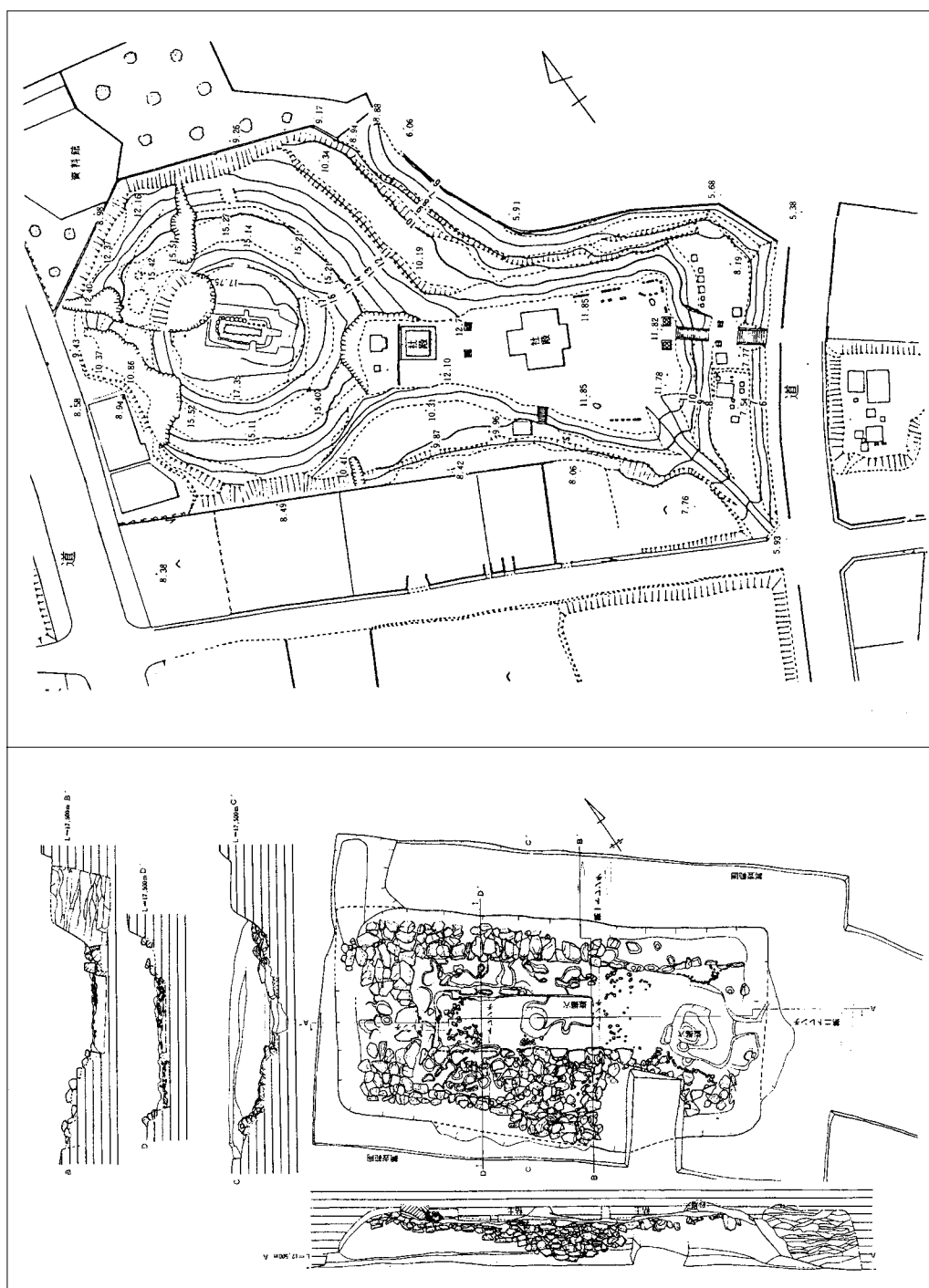


図2—104 荊田町石塚山古墳
(荊田町教委「石塚山古墳発掘調査概報」より)

や、何よりも前方後円形という外形の特徴は初期の古墳文化そのものである（小田富士雄ほか「宇佐市の先史・原史時代」『宇佐市史』上巻、一九七五）。これらの九州で最古とされる主要な前方後円墳がいずれも瀬戸内海に面した豊前地方に位置することは、西に向かって勢力圏を広げた初期ヤマト政権が九州へ記した第一歩であつたと評価されることが多い。海路を確保する上でこの地が特に重要視されたと考えられている。あるいは邪馬台国の時代から属国的位置にあつた玄界灘沿岸地域へいたる中継地としての意味もあつたかもしれない。

弥生時代末期の首長墓としては、豊津町徳永川ノ上遺跡で発見された墳墓群が京築地域では規模・内容ともに突出したものであるが、それらは箱式石棺や石蓋土壙墓などを埋葬部とする一辺長十数メートルの低墳丘の方形墓で、出土品は小型銅鏡一枚あるいは鏡片、鉄剣・鉄鏃・鉋などの若干の鉄製武器・農工具や玉類、そして在地系の土器であつた。勝山町小長川遺跡や行橋市下稗田遺跡で発見された墳墓も同様である。また、これらの墳墓では内部に複数の埋葬部が納められることが多く、個人のためのものではなかった。石塚山古墳のように大規模な前方後円形の墳丘をもち、長大な堅穴式石室、葺石といった施設を備えた個人のための墳墓は地域で自然発生的に成立したものではありえない。北部九州の人々から見れば、前方後円墳はまさに突如として出現した驚異的な構造物であつたものと思われる。

北部九州の纏向 一方、小郡市津古生掛古墳は全長三三メートル、**型前方後円墳** 後円部直径二九メートル、前方部長四メートル、同前

部幅一二メートルを測るやはり初期の古墳である。後円部は正円とならず、前方部も形状が整わず極めて短く、その先端部が撥形に開く纏向型前方後円墳である。組合式木棺に復原される主体部はすでに破壊されていたが、棺内外から中国古代の後漢晩期から三国時代初期、三世紀前半ごろに作られた方格規矩鳥文鏡一枚、ガラス小玉、鉄剣一点、鉄鏃三三点、鉄斧二点や鳥形土器をはじめとする土器が出土した。鉄鏃は定角式と呼ばれる古墳時代前期に流行する銅鏃と共通する形態で、土器とともに畿内系の遺物といつてよいものである。また、この古墳の裾には円（方）形周溝墓七基などの「付設遺構」が取り付くことも特徴的である。（小郡市教委「津古生掛遺跡Ⅱ」『小郡市文化財調査報告書』第四四集、一九八八）。

纏向型前方後円墳を提唱した寺澤薫は、この種の前方後円墳は奈良県纏向遺跡の墳墓群の影響下に東北地方南部から南九州にまで「定型化」した前方後円墳に先立って造営されたと考えている（『纏向型前方後円墳の築造』『考古学と技術』一九八八、同「王権誕生」『日本の歴史』〇二、二二〇〇）。北部九州では津古生掛古墳のほか、福岡県那珂八幡古墳（福岡市教委「那珂八幡古墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第一四一集、一九八六）・名島古墳（池崎譲二ほか「名島古墳調査報告」『福岡市歴史

資料館研究報告』一四、一九九〇）、筑紫野市原口古墳（森山栄一「原口古墳」『第二四回埋蔵文化財研究集会定型化する古墳以前の墓制』第1分冊、一九八八）、甘木市神蔵古墳（甘木市教委「神蔵古墳」『甘木市文化財調査報告書』第三集、一九七八）、小郡市津古一号墳（小郡市教委「三国の鼻遺跡Ⅰ」『小郡市文化財調査報告書』第二五集、一九八五）、佐賀県唐津市双水柴山二号墳（唐津市教委「双水柴山遺跡」『唐津市文化財調査報告書』第二〇集、一九八七）などを類例として挙げている。那珂八幡古墳は第二主体部（木棺直葬）から、名島古墳・原口古墳は粘土槨と推定される埋葬部から、そして神蔵古墳は長さ五メートル余、幅一・六メートルの長円形に近い堅穴式石室からそれぞれ三角縁神獣鏡を出土した古墳である。これらから出土した土器は「庄内式新段階から布留式」の段階に比定されている。しかし、纏向型前方後円墳と三角縁神獣鏡を出土する定型化した前方後円墳から出土する土器の間に明瞭な一線を画すことは困難である。また、従来、粘土槨といった堅穴式石室を簡略化した埋葬形式は、古墳発生から一定段階遅れて出現するものと見なされてきたが、この有力な学説を覆す努力もなされていない（小林行雄「堅穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』一九四一）。

纏向型前方後円墳が提唱された当時、そのモデルとなった纏向古墳群では周溝出土の土器以外に内容が判明した古墳はなかった。その後、ホケノ山古墳が発掘調査されて一端が明らか

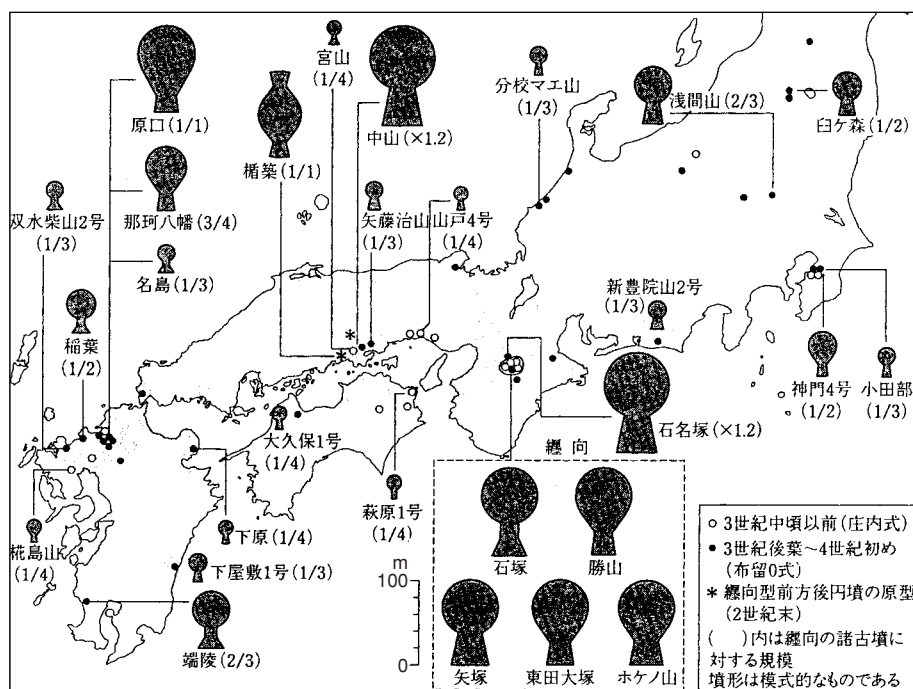


図2-105 纏向型前方後円墳の分布（寺澤薫「王権誕生」より）

となったとはいえ、その内容は非常に特異なもので、提示された纏向型前方後円墳との間で主体部構造や出土遺物で共通するものはほとんどない。纏向型前方後円墳という古墳型式が成立し、かつ定型化した前方後円墳に先立つものであるのか、あるいは後の帆立貝式古墳と呼ばれるものや前方後方墳のように、ある種の制約から墳丘形状（前方部の形状・規模）が規制されたものか、個別の古墳の詳細な発掘調査例が乏しい現在ではまだ結論が見いだせないというのが実情ではなからうか。

邪馬台国傘 『魏志倭人伝』で邪馬台国に服属するとされた**下の国々** 北部九州の国々の状況を、一部重複するところもあるが見てみよう。

福岡市・春日市付近に考えられている北部九州最大の奴国^なでは、福岡市那珂八幡古墳（八四^ミ）の第二主体部の木棺墓から三角縁神獸鏡を出土している。第一主体部は未発掘だが、奴国中枢部近くに立地する。筑紫野市原口古墳は福岡平野最深部に位置する全長八六^ミの前方後円墳で、古い時期に三角縁神獸鏡三枚・鉄刀・鉄斧などを出土したが、石材が発見されていないことから埋葬部は粘土槨と推測されている。そのほかには東区名島古墳（三〇^ミ）が初期の前方後円墳と推測されており、詳細が不明な天神森古墳（三角縁神獸鏡一枚・盤龍鏡一枚）・香住ヶ丘古墳（三角縁神獸鏡一枚）などで舶載鏡の出土があるが、いずれも小規模な古墳と推測されている。箱式石棺から二枚の

舶載鏡や銅鏃などを出土した西区五島山古墳も詳細が不明なままに破壊されたが有力な古墳であろう（亀井明德「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」『九州考古学』三八、一九七〇）。

弥生中・後期の王墓が知られている伊都^い都国（前原市周辺）は北部九州随一の前方後円墳密集地域であり、総数は五〇基をこえ、その四割が前期に属するという（柳田康雄『伊都国を掘る』二〇〇〇）。しかし、内容が判明する古墳は多くはない。前期後半に築造された二丈町銚子塚古墳は発掘調査されて内容が判明した数少ない古墳である（一〇三^ミ、小林行雄「一貴山銚子塚古墳の研究」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一六輯、一九五二）。それを遡る古墳として前原市御道具山古墳（六五^ミ）・同市端山古墳（七八^ミ、福岡県教委「三雲遺跡」Ⅲ『福岡県文化財調査報告書』第六三集、一九八二）や志摩町稲葉一号墳（四四^ミ、志摩町教委「稲葉古墳群」『志摩町文化財調査報告書』第五集、一九八五）などの前方後円墳が推測されている。この地域では稲葉一号墳で大破した竪穴式石室が確認されているが、舶載三角縁神獸鏡は詳細が不明な前原市大日古墳の二枚が知られているだけで、まだ古墳時代前期の銅鏡は少ないようである。福岡市西区の山の鼻一号墳（五〇^ミ、福岡市教委「山の鼻一号墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第三〇九集、一九九二）・同二号墳（七五^ミ、福岡市教委「山の鼻二号墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第三五三集、一九九三）も前期と推測され

ているが、破壊がひどい。

佐賀県唐津市付近とされる末廬^{まつろ}国では双水柴山二号墳・久里双水古墳が知られている。前者は全長四一メートル以上に復原される前方後円墳で、埋葬部の割竹形木棺から刀子が、墳丘から古式の土師器が出土したが、前方部前端が不明瞭で前方後円墳とすることに疑問がある（唐津市教委「双水柴山遺跡」『唐津市文化財調査報告書』第二〇集、一九八七）。後者は全長一〇八メートルと玄界灘沿岸では最大規模をもつが、葺石や段築成は確認されていない。埋葬部は長さ二・五メートルの小型の堅穴式石室で、中国製盤龍鏡一枚や刀子・玉類がわずかに出土した。初期の古墳と考えた場合には石室形態や乏しい副葬品は特記すべき現象であるが、出土土器はそれほど古いものとは思えず、前期後半以降の古墳と見れば評価が変わる（同「久里双水古墳調査概要（三）」『唐津市文化財調査報告書』第五九集など、一九九四）。

そして、壱岐・対馬では初現期の古墳は未発見である。対馬には古墳そのものが非常に少なく、反面壱岐は優秀な金銅製品をもつ大型古墳が知られるが、後期に属するものである。

以上の弥生時代以来の国々の中で、那珂八幡古墳の中心主体が不明であるものの、堅穴式石室と三角縁神獣鏡をセットで併せもつ古墳はなく、粘土槨が当地で創造した主体部と考えられない点を考慮するならば、先述したように原口古墳なども初現期の古墳とするには疑問が残る。古墳時代の開始を邪馬台国と

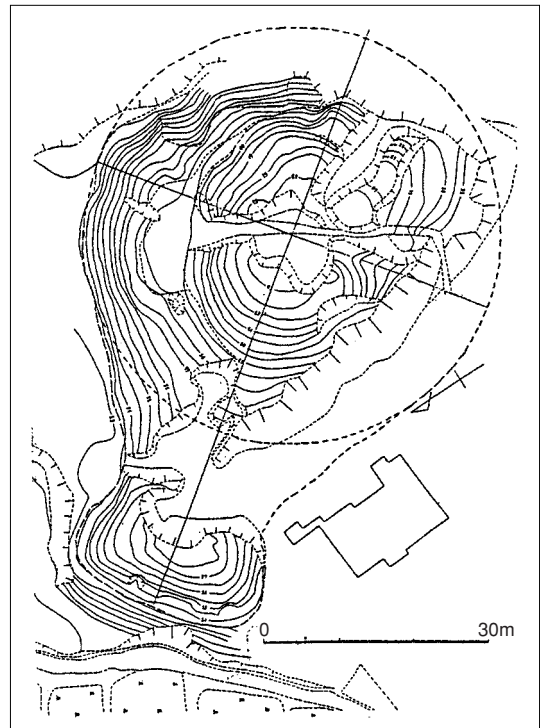


図2—106 筑紫野市原口古墳
(森山栄一前掲書より)

関連づけて考える場合、これら邪馬台国傘下の国々で初期の古墳が現在のところ確認できていない点は重要であろう。『魏志倭人伝』から推測されるような特別に深い関係を読みとることは困難というのが実情である。そのことはまた石塚山古墳・赤塚古墳の評価にも影響する。ヤマト政権は、豊前を拠点として玄界灘沿岸地域の古い国々の再構築を目指したものであろうか。ただ、諸国を監察する「一大率」がおかれた伊都国の故地、前原市付近に中小の前方後円墳が集中している現象は注目すべきであり、将来的に歴史を書き換える発見もありうる。

初期の前方後円墳が初めて造られて以降も、弥生時代小古墳の墳墓とほとんど変わらない一辺長(直径)十

数ほどの小規模な古墳が各地で造られた。前方後円墳のように単独で位置することはなく、数基ないし数十基が隣接している。こうした小型墳は多くの場合に方形を呈していて、弥生時代以来の墳墓形式を踏襲するように見える。しかし、山陰地方や北陸地方で弥生時代にその個性を放っていた四隅突出墳と呼ばれる形態はすでに造られなくなったように、少なくとも外見上は地域性が払拭されていた。

北部九州の場合も弥生時代に甕棺を納めた古墳状の墳丘墓が甕棺墓盛行地域を中心として分布した経緯があるとはいえ、それは一部の指導的な一族を葬ったもので、広範に使用されたものではなかった。したがって、古墳時代に認められる小規模な墳墓について、弥生時代以来の系譜を引く墳墓という定義付けはなじまない。

京築地域においては竹並遺跡(竹並遺跡調査会『竹並遺跡』一九七九)、荇田町天疫神社古墳群(荇田町教委「松陰天疫神社古墳群」『荇田町文化財調査報告書』第一〇集、一九八八)、勝山町野添遺跡(福岡県教委「野添遺跡」『福岡県文化財調査報告書』第一四一集、一九九九)や大平村能満寺古墳群(大平村教委「能満寺古墳群」『大平村文化財調査報告書』第九集、一九九四)などが知られ、剣・刀子・鉋・斧といった鉄製品が一点程度副葬さ

れていた。

群集する大規模なものとして福岡市藤崎遺跡(福岡市教委「藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第八〇集、一九八二)や甘木市立野遺跡(福岡県教委「立野遺跡」(二)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』五、一九八四)などがある。一般に副葬品はやはりわずかな鉄製品・玉類であるが、藤崎六号墓では舶載三角縁神獸鏡一枚が、立野遺跡一〇号墓ではこれも出土例の少ない筒形銅器が出土した。筑紫野市阿志岐古墳群も低墳丘の小規模墳が丘陵上に並んでいるが、その二六号墳から銅鏃二九点、鉄製品(剣・鏃・斧・鋸)などが出土して注目される(筑紫野市教委「阿志岐古墳群Ⅱ」『筑紫野市文化財調査報告書』第一二集、一九八五)。特にこれらの青銅製品はヤマト政権から配布されたと考えられている遺物で、小規模墳から出土することとは非常にまれである。また、能満寺一号(直径約一三メートルの円墳)・同一号墳(二辺約一二メートルの方墳)は、小規模墳ながら葺石が施され、これも前方後円墳に使用された葺石を模倣したものと思われる。

この種の墳墓からはほぼ例外なく布留式(古段階)と呼ばれる土器が出土する。これらの弥生時代と同様な墳墓群も地域の伝統を示すというよりは、やはり前方後円墳に代表される新しい政治体制に組み込まれた小首長によって造られたものと考えるべきであろう。大規模な古墳に葬られる人々だけで地域の支

配はなしうるものではなく、さまざまな役割を分担した中間者層が存在したはずであり、円形や方形の小古墳にはそういった人々が葬られたものと思われる。

なお、このような小規模墳の群集は五世紀代以降も存在し、初期の横穴式石室をもつ古墳群、群集墳へと現象的には連続的に展開する。群集墳の歴史的な評価については、先述したように屯倉制や部民制の広範な施行による、ヤマト政権の直接的な民支配の拡大に求められている。四・五世紀代の群集する古墳と六世紀代の群集墳との相違点は、大きくは分布の一層の拡散という点であろう。初期の小古墳のように支配体制の一翼を担う階層を造墓主体に想定するには古墳の数が多過ぎ、古墳を築

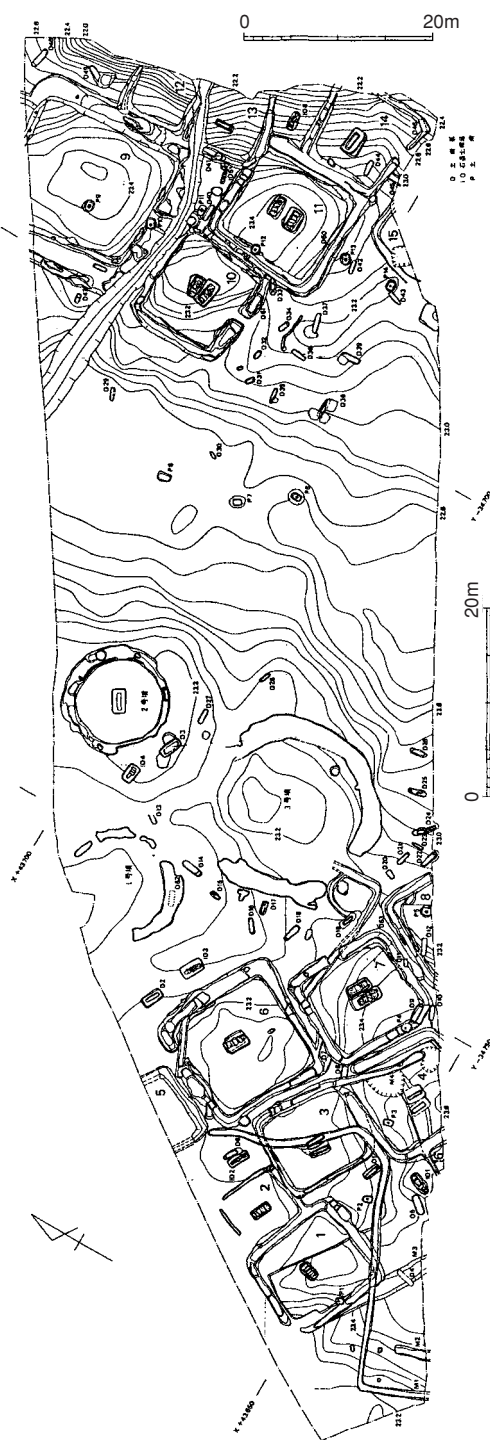


図2-107 立野遺跡遺構配置図
(福岡県教委報告書より)

造できる人々が大幅に増加したと考えざるを得ないのである。京築地域でいえば、椎田町東部から豊前市西部の丘陵上にある古墳群や行橋市福丸地区、荏田町白川地区の山麓に位置する古墳群が典型的である。ほとんどが六世紀後半以降に造られたと考えられるそれらは、往々にして直径一〇メートルに満たない規模であり、副葬品をほとんど持たないこともある。

首長の系譜

石塚山古墳に継続する古墳は周辺地域では未発見である。これに続く地域の大規模古墳は五世紀代の行橋市石並古墳や荏田町御所山古墳であり、空白期は一〇〇年以上の長期にわたることから、数基の首長墳がすべて破壊されたと考えより本来的に存在しなかったと考える方が

妥当であろう。石塚山古墳を造営した主体はどこへ行つたのか。加えて、市街化して発掘調査例が少ないという理由があるにしても、周辺には弥生時代以来主要な遺跡も知られていない。

一方、山国川下流域では大平村・吉富町で三基の首長墳が発見されている。能満寺三号墳は全長三三メートルの前方後円墳で、小規模ながら葺石の残存状況から後円部三段、前方部二段に段築されていたと推測されるが、山国川側から仰ぎ見られることを意識したらしく、その背面となる部分で形状が乱れていた。埋葬部は川原石を使用した竪穴式石室と推測され、徹底的に破壊されていたが攪乱中から舶載夔鳳鏡片と同じく舶載と思われる獣帯鏡を出土し、それ以外の遺物は確認できなかった（大平村教委「能満寺古墳群」『大平村文化財調査報告書』第九集、一九九四）。能満寺古墳群の南五〇〇メートルに西方古墳が位置する。発掘調査はなされていないが、現状で全長五三メートル、後円部直径三二メートルの古式の墳丘形態を示す。能満寺三号墳に後続する首長墳である（福岡県教委「金居塚遺跡Ⅰ」『一般国道一〇号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第四集、一九九六）。これらは前期前半、同後半に属するものと想定しているが、中期中ごろに比定される古墳に吉富町楡生山古墳がある。古くに発掘され、周辺の開発が進んでかろうじて古墳とわかる程度に浸食されているが、平成三年（一九九一）に行われた部分的な発掘調査に



図2—108 宇佐市川部・高森古墳群

(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『うさ・くにさきの歴史と文化』より)

よってくびれ部を確認したことからあらためて前方後円墳であったと知られるにいたった。規模は後円部直径が一七[㍻]と推測されるほかは不明である。現存する出土品は乏しいが、出土した埴輪などから年代が推測された(吉富町教委「楡生山古墳」『吉富町文化財調査報告書』第三集、一九九一)。これら三基の古墳は直系の三代の墳墓とは考えられないが、前方後円墳を継続して築造できる有力な集団が地域内に存在したことを示す。能満寺三号墳の眼下には弥生後期の巨大な環濠集落が存在したことが推測されており、古墳出現以前から有力な集団が存在していた。

また、宇佐市赤塚古墳の周辺では近接して免ヶ平古墳(五〇[㍻])・角房古墳(四六[㍻])・車坂古墳(六〇[㍻])・福勝寺古墳(八〇[㍻])などが継続し、鶴見古墳(三〇[㍻])が時期的にやや孤立するようであるが六世紀前半まで前方後円墳が造られた。川部・高森古墳群と呼ばれて「菟狭国造」一族の墓域と目されている(図2-108、古墳の規模は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『図録うさ・くにさきの歴史と文化』一九八一、古墳の編年は真野和夫「九州―東部(大分)」『古墳時代の研究』一〇。地域の古墳Ⅰ 西日本、一九九〇による)。この古墳群の周辺部でも弥生時代前期から後期にいたる長期間にわたって環濠を伴う地域の中核的な集落が継続していたことが判明している。豊前南部の拠点としてヤマト政権に重要視され、かつそれに応える

だけの能力を備えた集団であった。このように長期にわたって同一と思われる集団が権力を維持した例は九州でも多くないとはいえ、石塚山古墳に後続する有力な古墳が全く見られない豊前北部のあり方は山国川流域に比べても異様といってよい。この理由には、石塚山古墳の築造に対して地域社会からの労働力の動員は当然あったとしても、それが在地勢力によって主体的に造られたモニュメントではなかったことを予想させる。

前期後半には玄界灘に面した二丈町に一貴山銚子塚古墳が造られる。現状で全長一〇三[㍻]を測る玄界灘沿岸地域最大級の前方後円墳で、昭和二十五年(一九五〇)に未盗掘の埋葬部の竪穴式石室が発掘された。石室は長さ三・四[㍻]、幅一・四[㍻]で狭長なものではないが、舶載鏡二枚、仿製三角縁神獸鏡八枚をはじめ、刀剣類二七口や鉄鏃・玉類が出土している。ヤマト政権に直結する古墳としては第二世代の内容をもち、かつ副葬遺物の内容は九州内で突出している。北部九州全体で見た場合、石塚山古墳から一貴山銚子塚古墳へ盟主権が移動したと見ることにも突飛な発想とはいえないのである。ヤマト政権はこの段階で玄界灘沿岸地域をあらためて掌握したものであろう。

二 九州古墳文化の地域性

朝鮮半島への ヤマト政権が朝鮮半島への介入を開始した
進出と北部九州 中期初めの畿内系遺物の象徴ともいふべき